

3. 治療について知る

3

治療について知る

(1) 診断から治療までのながれ

がんと診断されてからもいろいろな検査が続きます。がんの広がりを見たり、あなたの体が、これから始まる治療を受けることができる状態かを調べます。早く治療してほしいと焦る気持ちや、がんが進行してしまうのではないかと心配になるかもしれません。しかしがんは、おおよそ月単位での進行です。担当医の説明を受けたら、セカンドオピニオンを取ったり、正しい情報を集めたりして、納得して治療を受けましょう。



(2) 標準治療と科学的根拠(エビデンス)

「標準」という言葉に、どんな意味を連想しますか？ 少し意外かもしれませんが、医療の世界では、現時点でもっとも“上等”ながん治療のことを「標準治療」と呼びます。

標準治療とは、科学的根拠に基づいた観点で、現在利用できる最良の治療であることが示され、ある状態の一般的な患者さんに行われることが推奨される治療をいいます。医療においては、「最先端の治療」がもっとも優れているとは限りません。最先端の治療は、開発中の試験的な治療としてその効果や副作用などを調べる臨床試験で評価を受け、それまでの標準治療より優れていることが証明できて推奨されれば、その治療が新たな「標準治療」となります。

ただし、すべてのがんで（特に再発後の）標準治療が確立されているわけではありませんし、患者数の少ないがんでは標準治療がないものもあります。それでも多くの治療法には、何らかの「科学的根拠(エビデンス)」があるものです。また、それがいない場合は、基本的に標準治療を決めるための試験である「臨床試験」として治療を行うのが通例です。治療方法が示されたときには、必ず担当医に、その治療の科学的根拠の信頼性は高いか、低いかを聞きましょう。

がん以外に心臓の病気や糖尿病などの他の疾患がある場合は、標準治療以外の治療法がよりよい選択となることがあります。標準治療以外の治療法をすすめられたときには、担当医にその理由を聞いてみましょう。

ていんさぐぬ花や
ちみさちす
爪先に染みてい
うやゆくと
親ぬ諭し言や
ちむす
肝に染みり
(ていんさぐぬ花)



3

治療について知る

(3) 臨床試験

「最先端の治療」が本当に効くのかどうか、安全、かつ倫理的、科学的に調べるための方法が「臨床試験」です。

臨床試験に参加するメリットは、より整った医療体制の中で、未来の標準治療を誰よりも早く受けられる可能性があることですが、一方で実際には現行の標準治療よりも効き目が高くなかったり、予想外の副作用を経験する可能性もあります。

このため、事前に専門家から十分な説明を受け、十分に納得した場合にのみ同意し、参加してください。なお、同意の後でも、治療の間でも、参加を取りやめることは可能です。



国立がん研究センターの臨床試験情報サービス

https://ganjoho.jp/public/dia_tre/clinical_trial/index.html

(4) 補完代替療法

補完代替療法とは、通常、がん治療の目的で行われている医療（手術や、抗がん剤治療をはじめとする薬物療法、放射線治療など）を補ったり、その代わりに行う医療のことです。

健康食品やサプリメントがよく注目されますが、鍼・灸、マッサージ療法、運動療法、心理療法と心身療法なども含まれます。

しかし、有効性が科学的に確認されているものは現在のところありません。そのため、情報の内容や選択については、よく吟味する必要があります。

もし関心のある補完代替療法があれば、担当医に意見を求めてみましょう。

👉 **コチラもCheck! 『がんになったら手にとるガイド』**

- 👉 用語の解説「標準治療」
- 👉 用語の解説「科学的根拠に基づく医療(EBM)」
- 👉 「臨床試験のことを知る」



(5) ゲノム医療

がんゲノム医療は、主ながんの組織または血液を用いて多数の遺伝子を検査することにより、患者一人ひとりに最適な薬を選ぶ方法です。

県内では、琉球大学病院および県立中部病院ががんゲノム医療連携病院の指定を受け、がん遺伝子パネル検査を行っています。まずは担当医と相談してみましょう。



国立がん研究センターのがんゲノム医療情報サービス

https://ganjoho.jp/public/dia_tre/treatment/genomic_medicine/gentest02.html

(6) 妊娠の可能性を残す^{にんようせい}(妊孕性温存療法)

薬物療法や放射線治療を行うことで、精巣や卵巣の機能が弱まり、妊娠するために必要な能力（＝妊孕性）が低下してしまうことがあります。

そのような可能性のある治療をする場合は、事前に担当医から説明があります。

基本的には、がんの治療を優先しながら、将来妊娠する可能性を残す方法（＝妊孕性温存療法）を考えることとなりますが、そこにはさまざまな選択肢がありますので、よく担当医と相談して、どうするのかを決めてください。

沖縄県では現在、妊孕性温存療法および温存後生殖補助医療にかかる費用の一部を助成する事業があります。詳しい情報に関しては沖縄県のホームページをご覧ください。



沖縄県がん患者等妊よう性温存療法研究促進事業について

<https://www.pref.okinawa.lg.jp/site/hoken/kenkotyoju/kenko/ninyousei.html>